

新千円札と JEM

さいとう ひろ ひさ
斎藤 博久

平成 16 年 11 月から登場する新千円札に、明治時代の世界的な細菌学者・野口英世の肖像が採用されることになっている。以前は、野口といえば母親孝行と黄熱病研究に身を捧げ犠牲になったことのみ、偉人伝などでよく知られていたが、渡辺淳一・著「遠き落日」により、破滅的な私生活や米国での医学研究競争の日々を含めて、実像が明らかになってきたように思われる（映画化もされているが親孝行のみが強調され、原作とは随分異なる）。とくに、私は米国留学中にたまたま「遠き落日」を読んだため、黄熱病研究における誤りを含めた彼の業績や生涯に強く共感することができた。

最近、野口の留学先であるロックフェラーから出版されている世界最高権威の雑誌の一つである Journal of Experimental Medicine (JEM) のオンライン版の目次を見ていたら、1896 年からの論文をすべてダウンロードできるようになっていた。早速、彼が世界的地位を確立した 1911 年のスピロヘータ・パリーダの純粋培養の成功に関する論文や、1913 年の進行麻痺や脊髄癆の原因が梅毒スピロヘータによることを証明した論文をダウンロードしてみた。

まず驚くのが、インパクトファクター 15 の JEM に、彼の論文が 106 編も掲載されていることである。そして 100 年近く前の論文なのに、現在の論文英語とほとんど同じ英語を使っており、すらすら読むことができるのである。上記のスピロヘータの純培養に関する論文の内容は、「Schereschewsky は、スピロヘータ・パリーダが培養可能であることを報告したが、毒性の消失した株を得たにすぎなかった。Bruckner らは患者組織から採取したパリーダを培地に移し、その後、ウサギに梅毒様症状を発現させることに成功した。しかし、今まで誰もスピロヘータ・パリーダを第二世代まで（毒性を保ったまま）培養したことはなかったのである。—中略— ここに私はスピロヘータ・パリーダの純粋培養と、それがウサギに梅毒様症状をひきおこすことに成功したことを報告したい。」というものであり、「これを読んだ世界中の研究者によって、私は認められるに違いない」という野口の高ぶりが伝わってくる。

ノーベル賞候補に 3 度もなりながら受賞できなかったのは、黄熱病研究などのように疑わしい業績もあったためといわれているが、それにしても、同じ医学研究を生業としているものにとって、上記二つの業績だけでも圧倒されてしまう。当時、日本から米国へ留学ということは、火星行き宇宙船に乗るようなものであっただろう。それが日夜努力を重ね、ついに大成功を収めたわけである。教科書から消えてしまった野口であるが、新千円札登場を契機に、彼の業績について（客観的な立場で）若い医師・研究者には、ぜひ理解していただきたいと願う。